９３年度　たんぼ耕作報告書

野川で遊ぶまちづくりの会・たんぼ班

１９９４年1月

目　　次

1　水田の所有者と耕作者等

2　水田耕作開始の動機

3　水田耕作の経過

4　収量・会計報告

5　アンケートより

6　９３年度の反省・９４年度の展望

7　資料

水田の所有者と耕作者等

住所　　調布市佐須町１丁目

所有者　　竹内　愛

地目　　農地（生産緑地）

面積　　３畝（約１００坪）

耕作者　　野川で遊ぶまちづくりの会（たんぼ班）

尾辻　義和　　大西　友幸

依田　輝男　　清水　美津江

大木　健次　　深沢　佑太

四方田　清　　井上　政子

東狐　貴一

条件　　収穫した米は５００円／ＫＧにて耕作者が所有者より購入する

わらは所有者に収める

水田耕作開始の動機

１、谷津田

左須のたんぼは「谷津田」と呼ばれる地形の中にある。「谷津田」とは、小規模の扇状地形の扇央部分＝谷からわき出る湧き水と、それが集まり流れる水路、その両側の水田と、水田の後ろの雑木林からなる地形または地域のことである。
これを左須のたんぼがある地域に当てはめると、農業高校演習林中の湧き水と、そこから野川に流れる水路、左須のたんぼと、かに山に残る雑木林、ということになる。
かつては甲州街道までの一帯が水田だったというこの地域は、現在でも野川に注ぐ水路の両側を中心に農地は残っている。とくに水路の上流には、調布でも２ケ所を残すだけとなった水田がある。
水路は今はコンクリート張であるが、水質はきれいで、両側の農地、その後ろの雑木林と共にザリガニ、ドジョウ、カワニナ等の豊かな生物相を維持する。雑木林と農地は水路の水質の保持にも寄与する。

左須のたんぼ、つまり「谷津田」のキーワードは、湧き水・水路・水田・雑木林、である。

２、野川であそぶ街づくりの会と「谷津田」の関わり

野川であそぶ街づくりの会（以下、当会もしくは会とする）は左須地域の水路を毎年、清掃すると共に生物調査をしてきた。『野川であそびつつ、生物調査・環境保護をとうして街づくりをしよう』という会の主旨にそった活動である。
さらに９２年の夏からは、「谷津田」の雑木林であるかに山で、炭焼きキャンプを企画してきた。

雑木林とは、その昔から里の住民にとって、燃料、食料、肥料の供給場所であった。住民は雑木林に常に手を入れ、間伐、下草刈りをっ欠かさず行ない森林相の維持に努め、雑木林は薪炭の原料、山菜、落ち葉を住民にもたらした。かつてより雑木林と住民の関わりの中で欠かせないのが間伐材の利用としての、自給用、或いは現金収入の手段としての炭焼きであった。
そしていま、炭は、単にレジャー用の燃料としての利用にとどまらず、その効用について再認識の機運が広まっているのは周知のとうりである。
雑木林との関わり、炭の効用に注目した当会が、炭焼きキャンプの企画にたどりついたのも当然だったのかもしれない。

さて、「谷津田」を活動のフイールドとする当会は、水路掃除、生物調査、炭焼きを行った。
９２年秋。その年の１１月の炭焼きキャンプの準備を行いながら、会員の中で『たんぼもやってみたい』の発言があった。
「谷津田」の頂きに立って下流を見ればそう思うのもむべなるかな、だった。

３、耕作決定まで

９２年冬の頃のミーティングで、たんぼをやるかどうかについて話された。

会としてやるのかどうか
誰がどうやって、どこの水田を借りる交渉をするのか
人手、スケジュール、農具、機械はどうするのか

ちなみに１年を通しての水田耕作経験者はミィーティングのメンバーにはいなかった。

代表が、いろいろなコネを通して、農家にアタックした。
めざすは左須地区上流のたんぼ。住所でいうと深大寺南町。毎年ここだけは必ず水田を作るという、約１０枚ほどのたんぼ。持ち主は５件くらいに分れている。
ダメだった。その５件にすべて断られる。

９３年になり、たんぼのことは忘れられかけた。代表が『一件貸してくれそうなところがある』と言ったのは４月になってのことだった。

４、準備

その時点で、たんぼ耕作を前提として準備していたことと言えば、別な先輩素人耕作集団より、稲作のスケジュールと注意点を聞いていたこと。
会として以下のことを決めたことだけだった。

会としての参加を決めたこと。（すなわち代表者は尾辻氏となる）
対外的な代表とは別に、内部の責任者を決めたこと。
耕作参加のメンバーを新たにによびかけたこと。
メンバーには活動費を負担してもらうこと。
収穫物を会で買とる等、貸手との間の基本条件を決めたこと、等である。

その間、とくに重要な点としてマークされたことは

『田植えにいたるまでの１ケ月と、収穫後の１ケ月は、毎週、あるいはそれ以上の動員態勢をとらなければならないこと』

『農家の技術的、無質的（機械、資材等）援助なくしては不可能。ゆえに農家との良い関係維持が必要』
の２点であった。

また、９３年度の耕作については、会も農家側も初回であるため、耕作メンバーは固定とし、不特定多数の者の農地および農家庭先への出入りをさけるとともに、まずメンバーの顔を農家の人に覚えてもらおうということも確認された。

代表が「大家」となってくれる農家を見つけた時点で、参加メンバー募集のよびかけ文が作られた。

５、なぜやりたかったか

なぜやりたかったかについての答えは、現在も各自、自問しつつあるというのが本当のところであると思う。

もちろん、会員たちが土と親しむことが好きだったことがひとつ。

会の主要なフィールドが「谷津田」であり、水田は欠くべからざるものとして、まだそこに現存していたという条件に恵まれていたことがひとつ。

そして恐らくは最も重要な目的として、会の主旨『まちづくり』にも関わることとしての「農」に、自分たちもできる範囲で参加したいという気持ちが強かった、ということがひとつ。

単なる手伝いでもなく、またまったく独自のやり方で好きなようにやるのでもなく、同じ地域に場所をかりて（正式な貸借契約ではもちろん無いが）、自分たちの力だけで（といっても大家さんの機械と道具そして指導をあてにはしているが）一年通して稲作をするということは、手伝い、レジャー、趣味、観察、という客観的立場から、一歩踏み出すことを意味する。

水田に一年通い、大家や隣接した畑の人と、逃げられない関係のなかに身を置くという状態は、「農」を業としてではないにせよ、地域活動、つきあい、生活、としてのレベルで体験することにほかならないのである。

当初のミーティングでも、同様な内容の意思を会員間で確認してスタートしたと記憶する。

水田耕作の経過

5月5日　　竹内さん宅訪問

会のメンバー５人で訪問し、条件等について打ち合わせ。

5月6日　　種もみ入手（２升）

5月9日　　種蒔き

約１０人が集まり、竹内さんの畑に、種もみを蒔く。化成肥料２分の一袋投入。

5月１６日　　苗代除草

苗代に変化なし、畑の除草を手伝う。

5月２３日　　苗代除草

２から３センチ発芽。雑草は無し。竹内さんと田植えまでのスケジュール打ち合わせ。

5月３０日　　苗代除草

6月6日　　あぜの除草

カマであぜの上部と内側の草刈りをする。苗代で七夕苗の間引き。

6月１３日　　くろつけ

９人参加。くわ３本使用。田の縁に沿って、溝を掘り（幅はくわ一本分）取水口から水を入れる。足で泥をこね、手でその泥をあぜに塗りつける。
水路の水量は十分。竹内さんの奥さんに指導を受ける。

6月１６日　　くろつけ

くろがはがれたので、平日にもかかわらず２人の参加で全面補修する。
くろは厚く塗ることと、（くわ２本分の幅の溝を掘り、十分な量の泥を作る必要あり）上から水でぬらしたクワでなでつけることが必要だった。

6月１８日　　新しい堰を作る

6月１９日　　しろかき

５人参加。たんぼ全面を網の目のように溝を掘るべく、クワで作業。２分の１しか出来ず。上流のたんぼが田植えのため、水量少なし。また、竹内さんのたんぼは、春まで畑だったため、水の吸い込みがよくなかなか水がたまらない。

6月２０日　　しろかき、苗とり、田植え

大人１２人、子供多数参加。当日の朝、たんぼは９割方水没している。まず化成肥料１袋半をまく。最初、羽根なしの耕うん機を使うが、その後、竹内さんの羽根つき耕うん機を借りることが出来、たちまちしろかきが完了する。
その間、苗とりと苗のたばねをやっている。また、別な農家から、もち米の苗を届けてもらう。苗代の苗４分の３程度を束ねて、十分と判断し、午前中終了。
午後から田植え。もち米１０列。あとはうるち米。ただし、うるち米と思って植えた中に、もち米の苗が混ったらしい（精米の後に判明）。田植えは１時間で終了。子供も含め全員素人由、苗の深さ・本数はバラバラ。終了後ビールで乾杯。.

7月２５日　　一番草

一株毎に、根のまわりの泥をかき回す。根に空気を送り込むとともに、細かい根を断ちより太い根の分結を促す。雑草はほとんどなし。

8月１７日　　消毒（パダンン水溶液散布）
平日につき、会員が一人で作業。既に田から水は引いている。
8月２２日　　二番草、あぜの除草

田を一畝ごとに歩く。メイガ及びそのマユが若干見られる。アマガエル、ショウリョウバッタ、イナゴ等みられる。穂はほとんどなし。
9月１９日　　かかしづくり、防鳥ネットづくり

園芸用棒１０本を立て、ビニールひもで結ぶ。また、タル木と古着を材料に、かかし２本を作る。
稲穂は出揃い、たれている。もみをつぶしてみると、中が液状のものと、実になっているものとがある。
１０月３日　　「市民が耕す農研究会」開催
ＴＡＭＡらいふ２１の分科会である「研究会」が、当会のたんぼを見学地として開催される。参加団体は、やぼ耕作団、レンゲの家、東京農大等。たんぼ及びかに山の見学の後、研究会。約２０名参加。
１０月１６日　　稲刈り

小雨模様をついて５人参加。竹内さんの奥さんの指導で、ワラの用意のしかた、稲の刈り方、束ね方を教えてもらう。もち米１０列を刈り終える。

１０月１７日　　稲刈り、はざかけ

８人参加。前日の残りを刈りとるとともに、はざを作りかけてゆく。束が小さいせいか、はざが５列にもなった。茎はやや青さが目立つ。たんぼにいる生物の種類の多さに驚く。

１０月２３日・２４日　　調布市消費者まつりに参加
米作りをテーマに、パネル、農具、稲穂等を展示。カカシ作りをイベントとして企画。

１１月６日　　脱穀

竹内さん所有の脱穀機で脱穀。同時に、ワラを束ね、はざの撤去。脱穀機がモーターとファンベルトで接続するという旧式のためと、各自が少しずつ体験的に作業を行ったため、日没後に及ぶ。

１１月７日　　モミすり

竹内さん所有のモミすり機にて。日没前に終了。

１１月１３日　　精米

佐須街道沿いの共同精米所にて。精米後の重さ１１４ｋｇ。ぬか１袋半。うるち米にもち米が均等に混じっていた。

１１月１４日　　精算（竹内さんへお米代等を支払う）

１２月１１日　　堆肥積み

４人参加（大人）。リヤカー２台分の落ち葉を、かに山から集め、鶏糞４袋（２０ｋｇ），ぬか４袋（４０ｋｇ）と混ぜる。用水路からバケツで水を汲み、かけて　、踏む。

１２月１９日　　堆肥積み

リヤカー２台。鶏糞、ぬか各２袋。たんぼの北西の隅の堆肥置き場（約３平方平方メートル）はほぼ一杯に。

収穫量・会計報告

収穫量

もち米	２４ＫＧ
うるち米	９０ＫＧ
合計	１１４ＫＧ

会計報告

１　収入	会費	５５、０００　円
	米購入費	５５、７５０　円
	合計	１１０、７５０　円
２　支出	機械・農機具代	１４、４１５　円
	資材費	１７、９９８　円
	肥料・農薬代	６、６９０　円
	精米費	８００　円
	食事代等	３、７３９　円
	お礼等	８、０２０　円
	米購入費	５７、０００　円
	合計	１０８、６６２　円
３　剰余金		２、０８８　円

アンケートより

９３年１２月２４日、たんぼ班事務局より耕作メンバーにアンケートが発送された。

アンケート

1，作業行程を振り返って、技術上の反省点。
2，スケジュール設定、連絡、催し物の連絡等、会の運営面について。
3、大家との付き合い方、参加メンバーの呼び掛け方等、耕作技術面以外の反省点について。
4，収穫した米、餅を食べての感想。
5，９４年度以降の目標、夢。
6，その他。

回答（要約）

1，について

種まき……風呂の残り湯につけて２日くらい置いた方がよいと教えてくれた人もいた。
くろつけ……けっこう力仕事でかつ技術を要し、また後々まで影響を及ぼす難作業だった。
水管理……豪雨のときは絶えず気を配って堰を外す必要がある。たんぼを干す時期についても、多雨の年は全く異なる。また、子供の仕業か大人のせいか、堰が外されていることもあった。
すずめに対する対策…ヒラヒラは朝露のとき、雨の日には通用せず。

・くろぬり…いい加減だった。はじめてなので、丁寧にやるべきだった。
しろかき……機械でやると楽。
道具など準備がいいかげんな所が多かった。

・初めて米作りに挑戦したが、夢中に過ごしてきて、気が付いたら秋が終わっていた。全国的な凶作の中、大きな成果だと思う。米作りの基本となる水だが自然相手のむずかしさを実感させられた。一年生にしてはよくできたと自分で感心した。

2、について

・催し物の企画については、米作りを会のなかでどのように位置付けるかによって、人数や酸化呼び掛け（例えば柏野小の子供達など）、催し物の企画等も異なってくるので、そのあたりをもう一度皆で話し合う必要がある。

・１０月３日のたんぼ研究会（市民が耕す農研究会）、たんぼの中間報告があればよかった。
１０月２３日の消費者まつり、外部との共同事業なので内部の甘えは通用しない。（担当者は）責任を持ってやってほしい。

・竹内さんに教えていただきながら、一年間とおしてほぼスケジュール通り動けた方出はないかと思う。
連絡だが、集まって仕事が終わった最後に、いる方だけでも連絡できること。
消費者まつりの展示や、研究会、餅つき、野川の調査等、楽しくまた勉強になった。

3，について

・なんとなく（大家とは）不安定な感がするので、もっとうちとける必要があると思う。しかしあせらずに自然とそうなるのがよい。
参加メンバーはある程度多く、しかし顔の見える範囲がいい。「市民が耕す農研究会」については、もっと一般に知ってもらいたい。

・たんぼを越えて活動ができなかった。そもそもたんぼも深大寺佐須の自然の一部で、野川・湧水との関連を無視できない。今年は作業に終始した、これは準備段階に問題がある。野川の会の活動の中心を占めるという自覚を持って、幅広く参加できるよう設定してほしい。

・竹内さんには親切にいろいろな事を教えていただきありがたいと思い、感謝している。
メンバーの方が親切に連絡してきてくれた。

4、について

・久しぶりの本物のこれぞ餅だという印象。無理して餅米を植えておいてよかった。
お米は結局口にしなかった。（柏野小の校長の口に入った）

・わらが多く混じっていて、とぐとき水で流すのに手間が掛かった。米にもち米が混じっていて、もったいない。お餅はおいしかった。

・以前、佐須の人に、この辺の米はあまりおいしい米ではないと聞いていたので、期待していなかったが、とてもおいしかったのでびっくりした。もち米が混ざっていたので、とくに美味しかったのかもしれない。今度は、うるち米だけでの試食をしたい。
米作りをして、米に対する愛情と、いとおしさが一層深くなった。
日本人の主食なので、一生の間に一回は、だれもが米作りに挑戦してみるのも意義があるような気がした。

5，について

・無理しないで私たちのできる範囲の目標は一反歩くらいか？
それくらいあれば、小規模に学校参加の呼び掛けができると思う。

・時間に余裕のある時期（８月９月）なら手伝ってもよい。

・皆と話し合って新しいことに挑戦したい。いろいろな活動の中から、感じる事、勉強する事、ストレス解消など、心豊かな生活ができるような活動ができればうれしい。そして何かのお役に立てれば最高だ。

6，について

・私たちの会が何故たんぼをやるのかの確認が必要であると思う。
本気で米作りを目指すのなら調布でやる必要はないのだし（田舎へ行けばいくらでも借りられる）
調布では限界が見えている。
都市住民に農の重要性や、湧水や、雑木林の重要性についてアピールする「しかけ」としては最適であると思う。

・（収穫祭での）おもちの配分がいい加減だった。お金を貰っているので、きっちりやってほしい。
報告書はしっかり書いて下さい。資料を充実させると次のたんぼ作業が比較的楽にゆく。（作業人数、道具、使い方、手順など）

・１９９３年は、野川の会のみなさんとの出会いが、とても私達家族にとって新鮮でした。

９３年度の反省

１、まちづくり

まち（ムラといってもいいか…）はできている！
７月、大家を訪ねると、仏間は盛大に飾り付けられ、お盆の準備が整えられていた。１０月のある日、大家の奥さんが明治神宮で収穫を祝う踊りを奉納するとて、踊りの際に手にもつ初穂のワラ細工を作っていた。もちろん、地域の、琥珀神社の秋祭りも行ったようだ。
多分、大家の一年を追えば、調布が農家と農地だけで構成されていた頃からのならわしが、年間行事として、生活の中に保存されていることに気付くのだろう。

まちはすでにできている！

ただし、ここでいうまちとは、先祖代々の土地を調布に持つ、主に農家で構成されるところの、まち、である。
一方、会の主旨でもある「まちづくり」でいうところの、まち、とはなにをさすのか？
簡単にいうと、人口的には主流となった、外部から流入の、非農家層と、代々の農家層とが、必要に応じて交流しつつ良好な環境を維持している地域、というのが会が目指すまち、であろう。
非農家層の側からの単発のイベントのみで、あるいは、農家層のみでの風習の維持だけで、好ましいまち、ができるはずもない。
各所で、それぞれ有意義な試みはなされていると思う。今回のたんぼづくりも、非農家層と農家層の継続的な交流、非農家層にとって他人まかせであった田畑・環境の維持・保全に加担することによる地域住民としての自覚、そして人を知り、土地の由来を知ることによって起こる地域への愛着心、に結実するのであれば、目指すまちづくりのささやかな実践ととらえてよいのではないかと思う。

２、水田耕作技術の修得に関して

通年の作業を実際に行い、充実感を感ずる心境ではあるが、下記の点で幸運に恵まれていたことを忘れてはならない。

品種は丈夫な在来種であったこと（アキニシキ）
種まきのタイミングを逸せず、種もみをまけたこと
くろつけの補修を平日に行える態勢にあったこと
しろかき用の耕うん機を、大家から借りられたこと
もち米の苗が手に入ったこと
田植えを６月中に終えられたこと
田植えの仕方が、たまたま深植えにならなかったこと
田植え後の水量に恵まれたこと
７月に根きりを行ったこと
はざをくむとき、じょうずな人がいたこと
はざかけを十分行い、実に栄養がおりたこと

これらは幸運だけではもちろんない、意識したとりくみの結果でもある。

また９３年度の耕作中技術的に力及ばなかった点としては以下のことがある。

苗代の管理……七夕苗の完全な除去（抜き取り）ができなかった。

くろつけ……水量の導入不足、泥の量の不足、により、後日すぐ剥がれた。手順の不手際。指導力不足。

しろかき……堰の不備による水量不足、並びに手順の不手際による過重労力。別途、耕うん機を借りてはきたが水田仕様ではなく、役に立たなかったこと。

取水口の管理…大雨のとき、あぜの一部から、水が他の畑にもれることが一度あった。
あぜを高くする事、大雨が予想されるときは、取水口を開ける（田から用水路に水が戻る）等のこまめな手当てが必要。

消毒……大家の指導でもあり、また、強力な殺虫剤でもなかったため今回はしかたなし。

化成肥料……大家の指導でもあり、また、当会でも堆肥を用意できなかったため今回はしかたなし来年以降、改善。

稲刈り……参加者全員に、刈り方、束ね方、束ねる量、はざの組み方、の指導を行えず。したがって、全体として手際のよいレベルまで至らず。

脱穀……機械の整備等を当日に行ったため、作業が日没後に及んだ。

全体として、機械、農具の使用上の細かな点に不案内な上、作業当日に機械の整備も含めた準備を行うことが多かったため、時間的ロスがあった。
また、作業内容自体も試行錯誤の段階で、個人の力量に頼る場面が多かったし、結果的に大過が無かったものの、自然任せ、大家におんぶにだっこという感じだった。

3、会の運営

必要経費はすべて、メンバーの会費でまかなわれた。
が、会の方からの主旨の不徹底、メンバーの参加の度合いのバラバラ具合等により、会費徴収が当初の予定通りにいかなかった。

田植え後のスケジュールの連絡を、文面化できず、電話連絡のみとなった。

たまたま、自営一名、変則勤務一名が会の中心メンバーにあって、耕作上の臨機応変な対応ができ、スケジュールの遅れに至らずに済んだ。

田植え終了後の作業については、スケジュールの設定等の準備作業が手薄だった。

4、その他

たんぼは子供にっとっても絶好の遊び場である。
田植えの時の泥遊びはもちろん、田植えの後も近くの小学生が、オタマジャクシの採集にあつまってきた。

一回消毒はしたものの、水田および周辺には豊かな生物相がみられた。

耕作、見回りに通ううちに、隣接の畑の人と知り合いになれ（依田さんの功績大）収穫祭のときの餅つき用臼一式を借りるなど、交流ができた。

当会にとってみれば画期的なイベントである、たんぼ耕作も、傍らを通る人にとってみれば単なる一風景でしかないのか、立ち止まってみる人、声を掛ける人などは少なかった。
ゴミの投棄こそ無かったが、例え一見して分かる素人がそこでやっているにせよ、農地と一般住民との間の壁を感じた。

９４年の展望

１、まちづくり

９３年と同様、会として無理のない範囲で、耕作を継続してゆく中で、大家との間を中心に、地域に存在する市民団体としての関係をつくって行くこと。

こころみに、大家の一年の行事を折りにふれ、追って、記録をつくってみるのもおもしろいのではないか。

９３年の、消費者祭りのような場にも、無理のない範囲で参加し、一般市民にアピールする。

２、耕作技術の向上等

うるち米ともち米との混植を防止する

手際のよいしろかき

くわの購入

春の用水路掃除に参加する

余力があれば、大家の畑の除草等に協力する

３、耕地の拡大および作物

現在の３倍（１反歩）程度は、隣接地であれば自力で耕作可能と思われるので、是非、面積を広げたい。というのは、もうすこしたくさん食べたいということ。
仮に、中心メンバーが７～８人いたとして、１軒あたり平均１表（６０ｋｇ）収穫を得たいとすると、１反歩の面積が必要になってくる。

また稲作の裏作として、冬小麦を栽培したい。

さらに、保存食造りとして、味噌、梅干し、柿酢、沢庵、等等、大家の協力が得られる範囲でチャレンジしてみたい。

堆肥は、９４年度も、積むこととしたい。

野菜の栽培は、等分見合わせたい。

４、会の運営

原則として、期間中（５月～６月）は毎週、メンバーのだれかが顔を出す。たんぼの様子を見て、他のメンバーに連絡し、必要な作業への動員態勢へつなげる。ミーティングを毎月もしくは隔月行う。

文章、写真による記録は作業の都度に行い、収穫後９４年中に報告書を作成する。。

スケジュールの発送等は、遅滞なく行う。

会費は、５月の時点で６ケ月分を前受けしたい。

田植え、かかし造り、収穫祭等は、オープン参加の地域のお祭りというふうにとらえ、企画を練る。

余力があれば、月１回程度の、たんぼ新聞の発行も考えたい。

他団体への見学、見学の受け入れ等、交流を継続する。

ゆくゆくは、たんぼ耕作の主体を、野川で遊ぶまちづくりの会有志とし、内部的にも責任体制を確立したほうがよいとは思うが、対外的に新たな展開も予想されることでもあり、しばらくは、現状のままとしていたほうが得策と判断される。

5、スケジュール

3月末をめどに、面積拡大、行政仲介等についての結論をだす。

4月中に、会員（たんぼ班）を集めてミーティング。会費徴収の件、予算承認の件等について話す。

5月初頭、年間作業日程発表。

田植え終了後、中間反省会。

8～10月頃に、他のしろうと耕作集団との交流会を開催を呼び掛ける。

収穫祭と前後して、年間反省会。（アンケート方式は取らず）

94年度耕作報告書に、佐須地区全体の保全計画案を織り込む。

5、その他

「行政にはたらきかけて、耕地を借り、耕し手を募集して、市民たんぼを拡大する」という構想もあるが、対応は慎重にしたい。
なぜなら。

もし、現在地と離れた場所でやるとなると、会のメンバーにとっては二度手間となる。

仮に新しい借地に十分な人手があったとしても、その指導等に関与することは、自らの耕作がおろそかになる可能性がある。（当会のたんぼ班には、まだまだそこまでの力はない）

よしんば、隣接地について、そのような話があったとしても、当会として責任を負える面積には制限があり、最悪の事態も想定したほうが良い（水が出ないとか、募集した人手が途中から来なくなるとかの状態でも自力でカバーできる範囲を意識する必要あり）

よって、まずは、隣接地に、当会として新たに借りる水田を探すのが先で、行政が絡む別件の市民たんぼの話があった際には熟考を要するものと考える。

それよりも佐須のたんぼを、谷津田を、どうしたいかを、そしてなぜたんぼをやりたいかを当会は考えるのが先だろう。

たとえば、自然広場、カニ山の整備（手入れ）、湧水地溜め池整備へつながる、谷津田再生の一環として、たんぼの復活を位置付ける。
その場合、行政がその仕事としない限り実現は不可能だろう。当会は最大限その計画に関与したとして、アイデアと若干の労力しか提供はできない。
東京でも、貴重な自然環境の保全といえども、最終的には地域住民、農民が動かぬ限り、保全は無理だ。保全が現実化するかどうかは、地域全体の意思のいかんによる。
農民については、水利権、農地法等、部外者の手のでない領域もあり、当会の志だけでは解決しない現実の手続きがある。
農民が農業を続けるか否かも、農民の独自の判断による。
それでもなお、当会なりの、地域に対する将来の構想をまとめ、行政、地域に対し、提示、協議する事はできる。

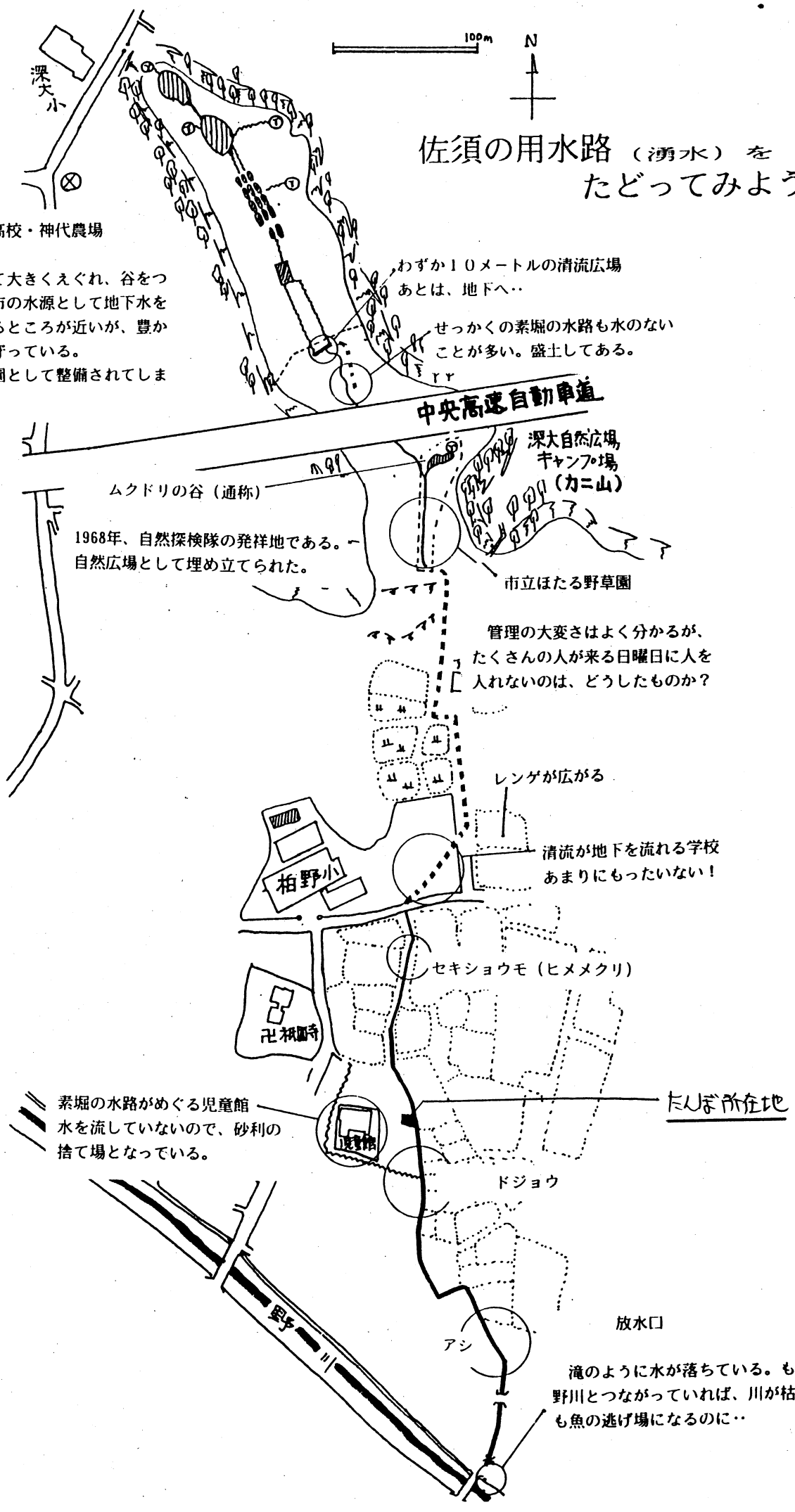
それにしても……

我々はなぜたんぼをやるのか。

自分で作ったうまい米を食べたいからか
土と親しみたいからか
少しでも身近に水田を残したいからか
家族や近所の人達と共有の時間をもちたいからか
好ましいまちづくりをしたいからか

本来、このことが確認されないと、当会として地域に関わる上での基本的態度の構築、ましてや行政サイドへのはたらきかけ、または対応もできないはずである。

佐須の用水路（湧水）をたどってみよう！



市民も参加して「農の再生」を！
「市民たんぼ」に参加しませんか

私達都市住民が調布に移り住んで本当によかったと感じることの１つは、緑の多い落ち着いた街だということだと思います。しかしその緑は深大寺や神代植物公園、国分寺崖線のそれを除けば屋敷林や農地に大きく依存しています。そして私達に本当に生きている緑を実感させ、日々育ってゆく大根やなすやとまとを愛でることができる農地は、画一的な公園よりもはるかに私達の心をなぐさめてくれるものだと思います。つまり都市における農地は私達都市住民の心のやすらぎの場として貴重な公園としての機能をはたしてくれています。

■「農」のもつ多様な価値に目を向けよう。

「生産緑地法」の改正により、都市農家は困難な選択を迫られました。このままでは調布のまちも都心のように唯家並が密集しつづけるアスファルトとコンクリートの街になりかねません。２１世紀の調布のまちづくりの事を考えれば、命の根源である食物が育つさまを目の前でみることができること、ふるさと調布の原風景、風土文化の伝承、子供の生活体験の場として農地はますます重要性を増していくでしょう。

さらに都市におけるヒートアイランド現象の緩和や地下水の涵養、深刻化するゴミ問題の解決にも大きな役割を果たすでしょう。

■「市民たんぼ」で「遊農」の第一歩を！

今度地主さんのご好意により私達の手で稲作りができることになりました。「種まき」「あぜ作り」「しろかき」から「田植え」「収穫」まで一通りを農家の方の指導を受けながら私達の手で行います。とても重要で、しかし維持していくことが困難になってゆく「農のゆくえ」に思いを巡らしながら、市民も農家の人達と共に微力ながら「農の再生」に向けて力になってゆきたいと願っています。そうすることが地主さんのご好意の幾分の一かに応える方法だと思っています。

■「市民たんぼ」に参加しませんか。

「土に親しみたいと思っている方」「植物を育てることが好きな方」「お米ができる過程に興味のある方」「子供に農作業を体験させたいと思っている方」「日本農業の行末を案じている方」「環境問題として農を考えている方」どなたでもお米作りに挑戦してみませんか。

［田植えまでの作業日程（予定）］

５／３１（日）　苗床除草
６／　６（日）　あぜ除草
６／１３（日）　くろぬり（あぜから水がもれないようドロで塗り固める作業）
６／１９（土）　しろかき（たんぼ全面に水を引き、土とかきまぜる）
６／２０（日）　苗取り、田植え

●集合時間：１０時　　●集合場所：現地（次ページ地図参照）
●持ち物：軍手、カマ（あれば）、手ぬぐい、帽子、水筒

［参加条件］

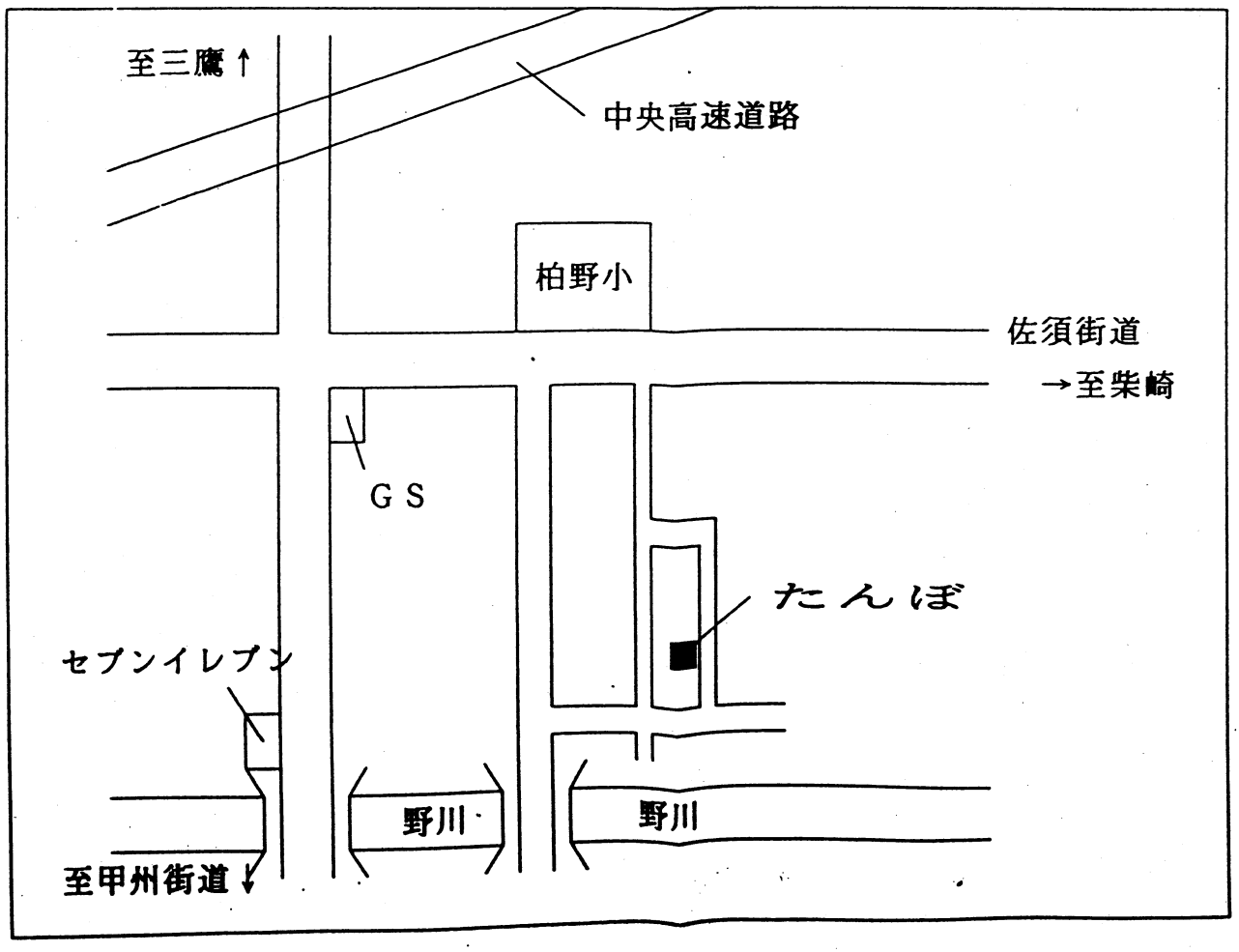
１．参加費：　毎月　１，０００円（５～１０月）…資材費等に使います。
２．収穫米の購入：　収穫した米は５００円／kgで地主さんより会が購入します。
（個人の購入希望は会から、同条件でおわけします。）

［連絡先］

野川で遊ぶまちづくりの会　代表　　尾辻義和　０３－５３８４－５５３９
同　　たんぼ班　大木健次　０４２４－８４－４０６７

［たんぼの場所］

調布市佐須町４丁目２１番地　竹内さん所有地内



田んぼと生き物たち

６月２０日

田植えも終らないうち、もうそこここから蛙の声が聞こえはじめ、夕暮れどきになるとつばめが飛び交っていた。

６月終わり

アジアイトトンボが稲のはっぱを渡っていた。

７月初め

おびただしい数のおたまじゃくしが姿を表した。

７月中

シオカラトンボ、ウスバキトンボ、ギンヤンマが姿を見せた。

８月初め

おたまじゃくしがいっせいに緑色の蛙（アマガエル）になり、稲の葉にとまっていた。

８月中

ナツアカネ（今年は非常に少ない）、コノシメトンボが２、３匹、たくさんのカマキリ、テントウムシ、ショウリョウバッタ、カタツムリ、イトトンボ、イナゴ、菜の花の葉の間に巣を張った黒と黄色の模様の大きなクモ、シオカラトンボのヤゴ、スジグロシロチョウなどなど

９月初め

アキアカネがいっぱいでてきた。用水路には、カワニナ、ザリガニ、シジミがいた。

『コメづくり宣言』

「野川で遊ぶまちづくり会」

谷戸の恵み

調布市深大寺南町から佐須町一帯。都立農業高校神代農場内の湧水が雑木林（カニ山、自然広場）から水田、畑のわきを流れ、野川にそそぐ。

湧水はきれいで、ホタルの餌となるカワニナという巻き貝も棲む。

水田に水を引けば、たちまちカエルの大合唱。夏はバッタ、カマキリ、シオカラトンボ。秋にはアキアカネ、イナゴの天国だ。

湧水を雑木林が保護し、水田耕作が維持されているからこそ、生物も生きながらえる。

都会の中のたんぼ

佐須の用水路一帯に今では調布でも珍しい水田が残っている。ふるさと調布の原風景として、雑木林とともに住民や訪れる者の心をなぐさめてくれる。

ところが、他の例にもれず、産業としての農業が都会にあってはほとんど継続困難な状況になっている。水田を維持している農家の方は高齢にさしかかっており、代替りして、果して水田は残っているであろうか。

しろうとの米づくり

今年４月、ひょんなことから念願の水田耕作が、「野川で遊ぶまちづくりの会」で行えるようになった。ある農家の御厚意によるものだが、ある意味では成立困難な都市農業のスキ間に偶然我々が入り込めただけかもしれない。

やれるかどうか不安だった米づくりも、全国的な大凶作の中、稲刈りを終えることができた。ほとんどの作業が我々にとって初めての体験だった。

米づくりは本来、その土地を守り続けてきた農家にとっては「レジャー」でも「心をなごませるためのレクリエーション」でもなく、生業としてあたりまえのことであった。

まちづくりの提案

都会の農家が自分の土地で、水田や畑を耕して、これから先も代々暮らしてゆけるようにはならないだろうか。そこまで考えるのは、しろうとの私達の任ではないかもしれない。なにかしらの縁があって調布に住むことになった私達住民が、佐須用水一帯の自然に将来とも接して暮し続けてゆくにはどうしたらいいのか。

その答を求めて、とりあえず、米づくりを始めた。そして、今後もやり続けたい。

しろうとが水田をわずかばかりやって、それで農地が存続し続けるとは思わないし、谷戸の環境が守られるとも思わない。普通の住民が、日々、地域でつき合い、地域行事への参加をし、あたりまえの地域が形作られた彼方にしか、あたりまえの「農」の存続はないのではないかと思う。

自然のやさしさに包まれて

野川で遊ぶまちづくりの会

私達の会は、調布の野川、野川周辺、野川へ流れる小川（湧水を源泉とする農業用水）等をフィールドにして、市民に呼掛けをして自然観察会、水遊び、水路清掃等を行なっている。これらの活動をとおして、自然とふれあい、そこに住む生き物と接することにより、川のあり方を考え、人のあり方を考え、そこに川があることによるすてきでよりよい生活環境を取り戻し、あるいは創り出すことを目的に活動している。

自然との共生を基本理念に、自分たちのまちを、自分たちで考え、自分たちでつくることをめざし、まちづくりの会と名前をつけた。

川で泳ぐ子供達

４月、５月の水枯れがうそのような水量の９月の暑い日、野川のいこいの水辺で服をきたままで泳ぐ子供達に出会った。きれいな水がたっぷりと流れていて、子供ならずとも入って泳ぎたくなるような、それこそみずみずしい川であった。

子供達は、そのうちに護岸に使われている岩の上から飛び込みを始めた。おおはしゃぎである。こんなに楽しそうに遊ぶ子供の顔を見ることはあまりない。テレビでよく見る郡上八幡の長良川で巨大な岩や、橋の上から飛び込みをする子供達の映像が目に浮かぶ。こんなふうに川で遊べたらどんなに楽しいだろうといつも思っていた。まさにその様子が目の前にある。子供が思いのままに遊び、ひとりが飛び込みを始めたら、みんなもまねを始めた。

この川がもうじきになくなってしまうのがにわかには信じがたい。

水辺の豊かな自然

春のもみまきから始まったわれわれのささやかなたんぼで、冷夏にもめげずに穂が垂れるようになった９月の日曜日、すずめに大事な米を食べられないように、子供といっしょに案山子を作った。案山子に着せた服は、いかにも都会の案山子らしく、背広だ。

そんな案山子作りの合間に、たんぼのわきを流れる用水路で、子供達が貝を見つけた。モノアラガイ、カワニナ、そしてシジミ？だ。この用水路で３回、生き物調査をしたが、シジミを見つけたのは初めてだ。わき水がまさに命の泉であることにあらためて感激した。

シジミ？はいつからここに棲むようになったのだろうか。かつて、この近くにサワガニがいて、いまでもカニ山とその名が残っているが、ひょっとして、どこかに生きているのではないかと胸が騒ぐ。

ここは、調布でも貴重な自然が多く残る佐須の用水路である。

この用水路のわき水も、４月にはほとんど枯れそうになった。この生き物の豊かなわき水の小川もやがてなくなるのが都会の宿命だ。

市民たんぼ

昨年の暮れだった。たんぼをやりたいねと誰かが言った。じゃーなんとか借りてみようかと誰かが答えた。が、世間はそんなに甘くはなかった。いろんなルートからたんぼを作っている農家にアタックしたが、返事はノーである。たんぼへの思いいれが伝わってくる。農家の立場になってみれば当然のことであろう。　素性の知れない素人

に貸せるはずがない。ほとんどあきらめていた、４月の自然観察会、清掃のために借りたリヤカーを返しに行って何気なくたんぼを探していることを話したら、そこでたんぼが借りられることになり、話はあれよあれよという間に決まり、しろうとの米作りが始まった。

都会の中でたんぼを残す意味があるのだろうか。どこもそうであるように調布のたんぼもなくなる運命にあるのか。

自然のやさしさにつつまれて

私達は、自然のやさしさに包まれて、すてきにくらしたいと思う。疲れた体を、そして心をいやしてくれるそんな自然に抱かれてくらしたい。日一日と開発の進む調布にあってそのようなぜいたくができるのだろうか。多難ではあるが、私達は、そんなまちを夢みて、具体的にまちづくりの試案を提言したい。私達の提言をたたき台にして、市民の方と共にまちのあるべき姿を考えていきたいと思う。

◎今年の活動記録（＊は米作り）

１９９３年

２月　消費者まつり参加
　　（わき水の生き物展示）
４月　佐須の水路で自然観察、清掃
５月　９日　稲の種まき＊
６月　６日　畦の草取り＊
　　１３日　くろつけ＊
　　１９日　しろかき＊
　　２０日　田植え＊
７月　野川「親子で生け捕り作戦」
　　生き物調査
　　２５日　１番草（草取り）＊
８月　親子炭焼きキャンプ（カニ山）
　　１７日　消毒＊
　　２２日　２番草（草取り）＊
９月　１９日　案山子つくり＊
１０月　１６日　稲刈り＊